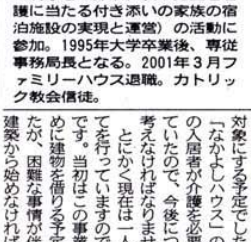

発信 中部から

野村　潔
中部教区教務局長

野宿生活者の自立を支援

1975年の冬のある日、名古屋において十数人の方々が路上で凍死・餓死したということが新聞で報道されました。その報道を通して野宿生活者の存在を知った人々は、たいへん驚きました。そして、この豊かな日本においてそんなことがあってはならないと考え、以来、27年にわたり野宿生活者の生命と人権が守られ、憲法25条に謳われている「健康で社会的文化的『最低』生活」を営めるよう、炊き出し、医療活動、夜回りなど様々な支援活動を行なってきました。

カトリック、聖公会、日本基督教団、ルーテル教会などのキリスト教会各派は、相互に協力しあいながら、殊に炊き出しを中心に支援活動を行ってきました。中には、聖公会の名古屋聖マルコ教会のように、一週に一度ですが、お風呂を提供するような活動も生まれてきました。

しかしながら、残念なことに野宿生活者の死者は減るどころか、名古屋市内だけでも毎年30～40人の死者を数えるようになりました。特に、長引く経済不況の下、野宿生活を余儀なくされる人々が激増しており（2002年3月現在、約2000人）、死者の数も益々増加することが憂慮されています。

また、野宿生活者の増加に伴い、彼らの生活環境も悪化しています。東京の東村山市で起こった中学生による野宿生活者の暴行殺人事件に類する事件も頻発しています。

このような野宿生活者をめぐる厳しい状況において、私たちは支援活動の当初の目的であった「一人の死者も出さない、炊き出しを必要としない社会の建設」の精神に立ち返り、従来の支援活動を見直す必要に迫られてきました。そして、緊急避難的な支援活動だけではなく、野宿生活者が「自立」するための支援活動、さらには野宿に至らないような生活支援（予防活動）を継続的に行うことが必要であると考えるようになりました。

事態の深刻さに、ようやく政府も重い腰をあげ、2000年以降、いわゆる「自立支援事業」として「自立支援センター」や「緊急宿泊施設(シェルター)」を、地方自治体と協力しながら各地に設置し始めています。また、民主党を中心に「ホームレス自立支援法案（仮称）」の国会上程も予定されています。

他方、私たちもまた、キリスト教会中心の支援活動を更に広範な活動にする必要があると感じていました。そのため、より多くの市民・団体・企業の理解と協力を訴えると同時に、自治体との連携を模索するため、特定非営利活動法人（NPO）の設立準備を始めました。昨年2001年8月末、約1年間にわたる検討と準備を経て、正式に「NPO法人ささしま共生会」の設立が愛知県によって認可されました。

「NPO法人ささしま共生会」としては、野宿生活者の生命と人権を守るために様々な事業・活動を行いたいと願っております。具体的には、衣食住の提供、医療・生活相談、就労機会の提供などを行いながら、野宿生活者の「自立」のための協力・支援を行いたいと考えています。また、野宿生活者を取り巻く差別と偏見が解消され、お互いに助け合い、支え合って生きることができるような共生社会の実現のため、社会教育の機会と場を提供したいと考えています。今後とも、皆さんのご理解・ご支援をお願い申し上げます。

山谷にかける夢

山本雅基さんに聞く

不況や失業率が話題になる昨今、山谷という地域では野宿生活者の問題が深刻化している。そんな中、山谷地域で「自立した社会生活を営むこと」だけに視点を向けることに疑問を抱いた一人の男性が、「きぼうのいえ」「なかよしハウス」と称した施設をつくり、野宿生活者らのためのホスピスケア施設を開設するために動き始めた。この支援機構の協力者である浅草聖ヨハネ教会の下条裕章司祭にも同席頂き、この壮大な計画に取り組む山本雅基氏（「山谷・すみだリバーサイド支援機構」代表）にお話を伺った。

山谷への思い

―「きぼうのいえ」設立の契機について

山本・私が野宿生活者に関心を持つようになった理由には2つの遠因があります。一つは、幼少の頃、初詣に行った時に見た、アコーディオンを奏でる傷痍(しょうい)軍人の姿です。この時の印象は強烈で、幼心にも、どうしてこのような気の毒な生活をする人がいるのだろうと思ったことを覚えています。2つ目は、子どもの頃に読んだ本です。来る日も、来る日も公園に座っているおじさんに子どもがシュークリームを届けるお話でした。毎日欠かさずその子はシュークリームを届けるのですが、ある日、おじさんの手にシュークリームをのせたら、それが転がり落ちてしまった。あれっ、と思ってよく見ると、おじさんは息絶えていた、というストーリーです。この本を読み、大変に痛みを覚えました。この2つのストーリーが、現在の私を育んだと言えるかもしれません。この痛みへの共感の思いが現実的になったのは、成人して、聖職につこうと思い、カトリックの修道院に入った時のことでした。その頃、「ぶどうのいえ」などの社会活動が始まり、私もこのような活動に関心を持ち始めました。その後10年間、「ファミリーハウス」という小児ガン、白血病、小児心臓病などで遠隔地より入通院する子どもと、その付き添いの両親を支援する目的で建てられた滞在施設で働いていました。この活動は、現在では軌道に乗り、国からの支援も得られるまでになりました。私はある意味でこの活動の目的は達成され、成果があがったと思っています。そうなった時に、また以前からの問題意識が気がかりになり、山谷の人々と関わりたいと思うようになりました。それで昨年の3月でこの仕事に終止符を打ち、いよいよ「きぼうのいえ」設立に向けて動き出したのです。

―「きぼうのいえ」の活動内容と目的は？

山本・実は、以前の職場を退職する直前に、山友会という団体と一緒に山谷地域や近くの河川敷のパトロールをしました。パトロールというのは、ホームレスの方々におにぎりを配ったり、健康状態を確認したりする活動です。こういう活動はいわゆる「ファースト・エイド」と言われ、緊急支援を意味します。その日に食べるものに困っている人、その時に具合が悪い、とかそういう緊急の問題をかかえる人のお手伝いをするのが役割なのです。

私が描くのは、ザーテレサの「死を待つ人の家」のイメージです。彼女のように人の死にまで関わり続けていきたい、と思ったのです。山谷には一口に路上生活者と言っても様々な人がいます。一時的に仕事がなくても、自立を援助されて仕事を見つけ、将来的には社会復帰できる人もいます。でも、高齢であったり、病気をかかえていたりする人は仕事を見つけて社会復帰するなどということは難しい状況です。入院している間はいいのですが、その必要がなくなればベッドの不足を理由に退院させられてしまいます。退院はしていないけれど、自立して生活できるほどの健康には恵まれず、身内がいない人のお世話を誰がするのでしょう？　そんな方々になんとか生活できる空間を提供し、またそういう方を迎えられる家族のような存在をつくるのが、この「きぼうのいえ」の目的であり、目標です。

―　現存する山谷での支援活動との相違は？

山本・山谷で支援を必要としている方々への手助けには、いくつかの方法があります。まずは先程お話した「パトロール」のような緊急を要する人への最初の支援です。その次に、いつまでも山谷で生活するのではなく、その人が自分の足で立ち、社会復帰をしていくことをお手伝いする自立の支援というのがあります。この分野では東京都としての取り組みもあります。しかし、私が行いたいのは、山谷の中でも最も弱い立場の人への支援です。高齢や病気のために、自立など促されてもどうにもならない人々への支援なのです。仕事を見つけて自立した社会生活を営めない人は、それだけで人から卑下されたり、罵詈雑言を浴びせられる。それでよいのでしょうか？　その人が、その人としている、ということを祝福できないのでしょうか。

社会から疎外されている路上生活者の人々に、その人の存在価値というものを伝えたいと思っています。それを伝えるために、本当に小さなことですが、誕生日にハッピーバースデーの歌を歌い、小さなケーキをプレゼントしています。あなたの誕生を、存在を祝う、というそんな小さな行為に涙ぐんでくださる方々もおられます。

「きぼうのいえ」では、ボランティアの人に介助者やお手伝いではなく、家族同様になってもらいたいと思っています。この「きぼうのいえ」という命名は、アシジのフランシスの平和の祈りとも関係があります。「絶望の中にも希望を」との祈りのとおり、山谷に希望を芽生えさせたいと願っています。

山本　雅基（やまもと・まさき）さん。1963年栃木県生まれ。1995年上智大学神学部卒業。1991年より、任意団体であったファミリーハウス運営委員会（遠隔地より入通院する小児がん、白血病などの難治性疾患児童と看護に当たる付き添いの家族の宿泊施設の実現と運営）の活動に参加。1995年大学卒業後、専従事務局長となる。2001年3月ファミリーハウス退職。カトリック教会信徒。

「きぼうの家」「なかよしハウス」の具体的な活動

―現在の状況と今後の活動

山本・今年の3月に「なかよしハウス」が活動を始めたばかりです。幸いにも賛同人、発起人として下条裕章司祭（浅草聖ヨハネ教会）、大畑喜道司祭（神田キリスト教会）、前田良彦司祭（東京聖テモテ教会）が協力して下さいました。その他にも仏教の僧侶や、カトリックのシスターの協力も頂けることが決まっています。人生の充実につながるのであれば、宗教にこだわるつもりはありません。「その人の家族同様になる」ということに共感を覚えてくださる方にはどなたにでも参加して頂きたいと思っています。

しかしハード、ソフトの両面ともまだまだこれからという状況で、「きぼうのいえ」に至っては、建物すら立っていません（9月に完成予定）。しかし「なかよしハウス」には行政からの紹介ですでに記憶喪失という問題をかかえる方が入居しました。山谷にはたくさんの支援の場所がありますが、「きぼうのいえ」はどこにも行き場のない人々の家にしたいと思っています。本来は「なかよしハウス」は介護不用な人を、「きぼうのいえ」は必要な人を対象にする予定でしたが、「なかよしハウス」の最初の入居者が介護を必要としていたので、今後について考えなければなりません。

とにかく現在は一人で全てを行っていますので大変です。当初はこの事業のために建物を借りる予定でしたが、困難な事情が伴い、建築から始めなければならなくなりました。そんなこともあって、活動を順調に開始するための資金が、3000万円から一気に1億円へと跳ねあがってしまいました。この活動が軌道に乗るまでの約20年間は、本当に頑張らねばならないと思っています。でも嬉しいことに、既にボランティアに立候補してくださっている方もあります。この計画には30名以上のボランティアが必要です。入居者の人格に触れる問題ですから、思いのある人に支援をして頂き、継続的に関わって頂いて、入居している方の家族のような存在になって頂きたいと願っています。病院、ホスピスのボランティアは、医者、看護婦の下で働く、という感があります。しかし「きぼうのいえ」では、身よりのない人の家族になって頂くのが最も重要な役割ですから、手伝えるか、ということより「家族になる意思があるのかどうか」ということにかかっているのです。「看取り班」などという言葉が適切か分かりませんが、とにかくその方が亡くなるまで関わっていく人が必要だと思っています。入居者はボランティアの人によって、自分は一人ではない、と感じることが出来るのと同様、ボランティアの人にも入居者の方が亡くなって、喪失感に襲われている時に傍にいる人を感じてもらいたいと思っています。ですから、ボランティアの方々のケア、というか霊的成長の手助けのようなことを今度は聖職者の方々などに助けて頂けたら、と思っています。

「きぼうのいえ」では、お弁当を届けることより、お弁当を一緒に食べる時間、といったように、関わり合いということを重視したいと思っています。

もともとキリスト教は旅人をもてなす、ということをしてきました。ホテルや病院などが発達したのは、この精神からです。ですから、キリスト教の原点に戻り、その人を受けとめるということにチャレンジしたいと思っています。規模は小さいけれど、壮大な計画です。知らない、通りすがりの人に対して警戒するのではなく、寝る場所と食べるものを提供できるような人間関係の信頼が回復できたらいいですね。

―最後に一言。

山本・目標金額を1億円と設定した献金にご協力をお願いします。それから一人でも多くの人にこの活動を伝えて頂きたいと思います。賛同してくださる方や、協力してくださる方を含め、私たちの家族を、仲間を増やしたいと思います。そして何よりも「きぼうのいえ」のために祈って頂きたいと思います。祈りは力になります。本当にこのことを実感する日々です。ですから、皆様の祈りを切に願っています。

連絡先・〒111-0022　東京都台東区清川2-29-11　電話03-3875-7523
献金先・郵便振替口座　00130-3-664844、銀行口座　富士銀行本所支店　普通1796118
口座名義はいずれも「山谷・すみだリバーサイド支援機構」